

# 雑草のごとく生きる

語り手 伊藤 とし子

新井二丁目

私、学校出たての新米の歯科医でした。勤務先は爆心地に程近い長崎の病院で、当時二一歳でした。この辺の建物は一瞬にして吹き飛び、ほとんどの人は死亡または瀕死の状態でした。

被爆当日のことですね。十一時をちょっと過ぎたときでした。その前から長崎では、「西部軍管区情報」のニュースで毎日空襲警報があつて馴れきっていたの。その日は、たまたま空襲警報が解除になつて。みんなこの時とばかり防空壕から飛び出してきて、何をするつて、さっそく七輪でご飯を炊く人もいれば、体を伸ばしたり、深呼吸をしたりする人もいました。

私は医者同士で患者の打ち合せをしていた最中でした。十一時過ぎに、急にピカッと強烈な光を受けて、大音響を感じたと同時にもう意識がなくなつてしまった。どのくらい時間がたったんでしょね。気がついたときには病院の地下の避難場所の梁の下敷きになっていたの。たまたま私は地下にはまっちゃつて、私だけは生きてはい出したけれど、そこではみんな亡くなつてしまつたというわけ。

もう何が何だかわからなくて、気がついたときは建物の下敷きで、やっとの思いではい出して外へ出たら……やられていた。あたりは暗黒そのもの。気を失つてから、何日たったのか、何時間すぎたのか、もうわからなくなつてました。

それで歩いて、死体を踏み踏み、やっとの思いで歩いていつたつてことですよ。ふらふらとね。お水がなかつた、血みどろになつたつて、みなさんそう話すでしょ。そういう話つていうのは、全員が、十万人からの人が体験しているわけです。たまたま私は爆心地にいるつてことを知らなくて、とにかくもうすごいですよ、もう。「水」、「助けて」といって、人間はいっぱい死んでいるから、それを踏むと、のし上がつてきてね。ふと気がつくと、自分自身も血まみれ、ガラスまみれで歩いてた。ふらつきながら無我夢中で歩いていくと、まあ顔が焼けただれて、半狂乱になつてる人、焼けた顔で家族の名前を呼び続ける人、片手をもぎとられて、それから放心状態で夢遊病者みたいに立ちすくんでいる人、服はちぎれているわ、髪は焼けただ

れているわ、子どもをおんぶした女の人がそのまま倒れているわ、学生さんたちも目玉は半分でなくなつて、腕はなくなつてですね。

それでも生きてる人は必死ですよ。体中にやけどやケガを負つて、焼けただれていても、それでも生きています。生きていますから、死にそんな状態になつていても、やけどやケガのことなど忘れて必死なんです。自分の体の状態など、もうわけがわからなくなつています。そして、ほかの生きている人間をpushさえて、私の手を引つ張りにくる。

その光景には、生への最後の執念を見せつけられたようでした。それはね、私、白衣着てたんですよ、医者だから。もう煮しめたような白衣ですけどね。それで救急袋ぶら下げているんですよ。だから、ケガした人たちが手を引つ張りにくる。泣いてすがつてきて、助けを求めろわけ。

私もね、自分の体の痛みを忘れて、包帯や薬品を出して治療しました。でも、あまりにもひどい状態で、もうどうすることもできなくて。薬つたつて、一人分の手当にも足りない程度でしたから。

原爆というものを知つたのは、あれは爆弾が落ちてから二、三日くらいでしょうか、長崎から三〇キロ離れた喜々津村のほうへ避難することにして、一升分の水筒をもって必死で三〇キロの道のりを歩いて逃げたんですよ。その途中で、米軍の偵察

機がビラをまいていった。そのビラに、落とされた爆弾は新型の原子爆弾だつてこと、広島にも同様のものを落としたりつてことが書いてあつて、そこで初めて原子爆弾なるものを知つたわけです。そりゃ、そのときは、これはデマに違いないと思ひましたよ。

そうやつて逃げている道中も、死体を取りに来たり、探しに来たり、死体をリヤカーで運んで行つたり。それも真夏だから肉が腐つて悪臭がひどい。もう人間とは思えないようなバラバラの死体ですよ。ブリキ缶や木箱にそういう死体を詰めてね。それから人力車で、もう死にそんなケガ人を運ぶ家族、ポロポロのトラックが、血だらけの人や病人を並べて運んで行くのを見ました。車のなかで死んでいった人も多かつたそうですよ。全部、終戦までの間に起きたことです。

たどりついた喜々津村では、被爆してやけどを負つた叔父さんがすでに避難しにきていたが、この叔父さんもやがて原爆が原因で亡くなつてしまひ、棺桶もない。死体の代わりに自分が棺桶のなかに入つてみて、大きさを合わせて、自分たちで棺桶を作つて焼いたりまでしているわけです。その翌日が終戦で、この頃から無性に故郷に帰りたくなつた。

たまたま諫早いさはやから列車が動くことになつたので、それに乗り込みましてね。列車といつても、缶詰列車なんて生やさしいものじゃない。泥まみれ、汚物まみれの、まるで汚物集積所のよ

うな列車でした。そのなかには被爆者もいて、気が狂ってしまった人や、下痢を起こしたり、呼吸困難を訴える人、通路はもう糞尿の山ですよ。その上に人間が重なり合っているという状態でした。死んだ人は、まわりの人がプラットホームに放りだしていきました。

広島についたときには、車窓から見える景色が長崎と全く同じで、地獄絵巻を見せつけられたと思いましたよ。

長崎病院のところでは、おそらく数万人の人が亡くなって、生き残った人というのはたまたま直外の婦長さんとか、そこになかった人ですね。ところが、私一人がそこで生き残った。十年間闘病して生き残ったんです。

ですから、医者になつて東京に出てきたとき、学会で長崎から出てきた人と会つて、私の旧姓は「五十嵐」ですから、私の顔をけんそうに見てですね、「五十嵐先生じゃなかとですか」という人がいるんです。私が「そうです」といったら、「おやー、生きとつたのですか！」つてそこでわかつたの、私が生きてるつて。それで、「あこりや大変だ、先生、原爆手帳もつてますか」つていうから、「そんなの持つとらんよ」つていって。

戸籍調べてもわからなかつたわけ。私、新潟出身ですから。辺りはみんな生存してないので、私が生きていることを証明する人が見当たらなかつたのです。私は原爆病で入院を十年くり返して、今なお原爆病と闘っています。

私の人生の半世紀は闘病生活の明け暮れで、体重も三六キロという子ども並なのです。とにかくとてもひどすぎて、あの時代の残酷さを話すことはとても困難です。

でも考えてみれば、あの時代の日本中の国民の誰もが戦争のために犠牲になっていたのです。しかし、だからといって、ただみじめつたらしいことばかりいっても、どうしようもないわけですよ。

私のように、開き直つて自分なりに精一杯、雑草のように生きていく人もいます。とにかく私は「不死身のとし子さん」といわれています。死ぬことを知らない(笑)。ただ、人には寿命ということがあります。いくら予測しても、精神的に、気力だけでは生きられるものではありませんものね。

ほとんどの人は、私なんかも含めて「もう死ぬ、長生きはない」つていわれ通してきましたよ。私は「うん、死んだんだったら元々だ」と思つてね。原爆症はあるけど、ちよつと火傷しただけでも放射能たくさん浴びている人は死んでいるし、個人差はありますよ。爆心地のそばにいて私みたいに生きているものもあるし、三キロくらい離れていたつて、ちよつと外を歩いていただけで命を失つたのです。

私なんか、長崎の人に「うわ、あの場所で生きとる人のおつたのですね」なんて言われるくらいですから。それで、八月九日は私の誕生日として家族で会食をしているのです。この日は、

「私が死にそこねた日」ですから。

私は職業を通じて、何か社会的に貢献できることがないかと、黙々と考えるようになりました。そこで手始めとして、闘病しながらアメリカの大学で勉強したり、ボランティアをしようという決心して、海外に出かけて実行したのです。ボランティアというのは、やってあげてるわけじゃない、自分の選択だから、私は好きでそれをしています。

自分が被爆したから、それで何か世界的に役立つことをしたいと思って、一人で勉強してきました。それで、私はいろいろな学会に出たり、障害者治療の活動をしたりしているんです。外国から勉強しにくる留学生の世話もたくさんしていますよ。下宿代無料でホームステイさせるから、代わりに英語教えるって、そうやって私は語学を日常生活から学んだの。

ボランティアに関心を抱いたのは、結局私は「死んだ人間」だからということです。とにかく、被爆した私は、何かのために貢献して死にたいと思ってるから、一人でダンスケかついで外国の学会へも出かけていくわけです。何か役に立つことをやらせてくれということで、そういう一念でやっている。

そう、原爆って何だかも知らない人たちが増えているでしょ。アメリカのネバダ州だって原爆ですよ。私は行っています。私が招かれるのは、だいたいネバダ州とかユタ州、それからワシントン州のリッチモンドって原爆をつくったところね。その土地

の人たちが、原爆のために農作物ができなくなってきているよ。それで困っているから、その当時のことや、原爆を受けた人の話を聞こうと行って、私なんかを招くわけ。

息子は被爆二世として手帳が出ていますよ。症状？ 何もありませんよ。それでも、孫が生まれるときには、それは本人は心配したそうです。私自身は、自分の出産のときは何ともなかった。心配とか不安とかは別になかった。だいたい私は第一線で働いていたし、仕事も忙しかったし。

もちろん被爆者に対する差別、偏見はありましたけどね。あの当時は「もう何年もいきられませんよ、髪の毛もはえませんが」ってさんざん私たち言われてきたわけ。女の人なんか、被爆した人はお嫁のもらい手がなかった。私は正確にいったら二一歳ですね、被爆したのは。

その当時はね、結局女は坊主にならなきゃいけない。そうでもないよと生きていけない。そんなことがいわれた終戦直後の「風評」の時代だったの。原爆にあったことはね、まるで伝染病患者のように扱われたわけ。被爆した人は結婚もできないよ、子どもも生まれないよ。そんなふうに思われていた。ええ、そうだと思いますよ。経験あると思いますよ。でも、うちの家族はこんな悲劇のある私の体験を、真正面から受け止めてくれていました。

最近知ったけれど、もうほとんど長崎のこと、広島のこと、

しゃべれる人がいなくなっちゃったんですって。私たちは忘れられないけれど、いまの若い人たちには、防空壕だとか、竹槍で人を殺すなんてことは信じられないでしょ。たくさんの日本人が死んだというけれど、長崎ってところは三菱造船、長崎造船、軍需工場などで働いていた朝鮮からの労働者も多く含まれていた。

日本人以外でも、たくさんの人が亡くなったり、病気になったりしているんです。要はね、私たちが犠牲者じゃないってことですよ。戦前、戦中、戦後を通じてね。長崎、広島だけじゃなくて、三月十日の大空襲で東京で焼け出された人だって、原爆だけがみじめたらしい悲劇のヒロインだと思ってはいけません。やはり自分で道を切り拓かなくちゃいけない。

私は今度の本の企画のように、原爆から五〇年たった今、体験者が歴史の真実と悲劇を語り継いでいくというのは、これはすばらしいことだと思って、この企画に深い敬意を表したいの。私にも真実と悲劇を伝えていく義務があると思う。いかに戦争が罪悪であるか、いかに戦争が恐ろしいものであるか、わかってもらうために。

ただ、やはり長崎、広島だけがみじめな悲劇のヒロインになっただけじゃないということね。とにかく、ノーモア原爆と平和のスローガンをかかげても、被爆者の心はいやされるものではないんです。だから早く二度と起こさないように、真実を伝え

て、道しるべを造っていくのが私たちの役目だと思ってますよ。私は九死に一生を得た人間ですから、そして戦争というのは人間が起こすものですから、戦争には無条件で絶対に反対していかないといけないと思っています。



## 聞き書きを終えて

悲惨な時代を乗り越えて、こんなにも前向きな生き方をしていらっしやる方がいるとは。エネルギーの塊のような伊藤と子さんの姿を目前にして、感動を覚えました。振り返って我が身をみれば、ささいなことで落ちこんだり挫折したり、情けないことの連続のような毎日。とし子さんの力強い話しぶりに励まされたようなかつこうです。

「あなた方、ジュリアナ行っていないの？ 私は行ったわよ」と、とし子さん。若い！ 外国のこと、ボランティアのこと、障害者治療のことなど話題はどんどん飛んでいきます。また、「被爆があるから今の伊藤とし子があるのでは」と疑問を投げかけた息子さんのお話も忘れられません。原爆の非人道性を伝えていくことはもちろんですが、逆境を逆境とも思わずたくましく生き抜いてこられた方々のことも忘れないでいたいと思います。

S・H

歯科医として、一般の患者の診療ばかりではなく、障害者や、被爆者の診療にとりくんでおられる。傍ら、ボランティアとし

て、留学生のホームステイを手広く引き受けたり、また長崎の爆心地での唯一の被爆体験を、国内ばかりではなく世界中に講演して歩いておられる。

よくぞ、原爆にむしばまれた小さな華奢なお体で、そのバイタリテイの凄さにはあきれかえる。地獄を見た人の、死線をさまよった人の、生還の証とでも言いましょうか。ただただ頭がさがります。

田中満子